地域との連携

地域との新たな連携基盤づくり

卒業生・在学生を巻き込んだ連携

ｷｰﾜｰﾄﾞ：卒業生・在学生・大学ブランド・校友会・連携企画

本事例の関係者

大阪産業大学

(株)白杉酒造(OB)

大阪産業大学校友会

文部科学省産学官連携
コーディネーター

大阪産大の酒　企画書

企画推進の流れ

平成20年5月
　企画提言
平成20年8月
　大学当局の承諾
　白杉酒造と打合
平成20年9月
　名称学内公募
平成21年1月
　商品化詳細決定

創立80周年を記念する連携商品の企画と推進

【要約】
コーディネーターは、共に卒業生の白杉悟・智永子夫妻が、１７７７年創業の「白杉酒造」(京丹後市)１１代目蔵元に就任した旨の記事(平成２０年１月２１日付産経新聞兵庫版)を、目にする。
　折しも、本学は、平成２０年１１月１日で学園創立８０周年を迎える。この二つの事項を組み合わせた記念商品を発想し、企画から大学・蔵元との折衝、商品化推進策の具体化までを、コーディネーターが主導的に進めた。
　若い女性が癒しを目的として嗜むことをコンセプトに蔵元と大学との共同企画としてまとめ、８０周年記念に相応しい在学生を含めた推進を実行すべく、酒の銘柄は在学生中心の学内公募とし、ラベルデザインは「デザイン学科」に担当して貰うこととした。その結果、銘柄は大阪産大のシンボル「ライオン」に因む「Leona Precoce」(おしゃまなライオンちゃん)に、精米歩合が５０％の吟醸酒を平成２１年２月末に上市することが確定した。学内行事の他、同窓会組織「校友会」からも協力が得られることとなった。

【きっかけ】
本学の卒業生が江戸時代創業の老舗蔵元を継承しだという産経新聞の記事が、「社文系」・「地域」をキーワードとする新たな地域連携活動を模索していたコーディネーターの目にとまったことがきっかけとなった。コーディネーターは「大阪産大の酒」を学園８０周年記念を踏まえて大学・学生・校友会を巻き込んだプロジェクトとして推進しようと「企画書」にまとめた。

【段取り・ﾌﾟﾛｾｽ】
「企画書」をイベント企画・商品企画の二つの観点から推敲し、実施可能な推進案にまとめ、コーディネーターの支援先組織である「産業研究所」の所長・事務長の了承を得て、理事長・学長に企画を提言し、推進の了解を取り付けた。
　早速、蔵元に企画を紹介しようとしたが、「お中元」シーズンは極めて忙しくシーズンオフまで時間がとれないとのことであった。待ち遠しかったオフシーズンの８月後半に天橋立で有名な京都丹後の宮津(丹後大宮)の蔵元を訪問、企画推進案を説明し蔵元としての意見を頂戴した。若い女性が癒しのために嗜むフルーティでやや甘口という酒のコンセプトは仕込み中の新酒で対応できること、容器は洋酒タイプがおしゃれでよいといった提案を頂戴し、企画推進のコラボレーションに快諾を得た。ラベルデザインや名称の学内公募も了承された。
　学内公募により名称は「Leona Precoce」に、ラベルデザインも固まったので、年明けに具体商品化の打ち合わせに蔵元を再訪し、流通・価格・初期出荷数量・発売日・荷姿などを確定した。

【成果・結果や活動後の変化】
卒業生である蔵元と本学のコラボレーションを基盤とし、デザインを「デザイン学科」で担当し、名称を学内公募としたこと、校友会を巻き込んだことなど、全学的な盛り上がりの中に学園創立８０周年を記念する「モノ」として、「大阪産大の酒」が完成した。

地域との連携

大阪産大の酒

成功の事例

創立記念を巧く利用、周りを広く巻き込んだ

●情報に対する感度が高かった

産経新聞の兵庫版の記事に目がとまり、学園の創立８０周年記念との組み合わせにピンときたこと、これが全ての始まりであった。これは、日頃から新たな連携の「ネタ」を探索する心掛けと企画心の瞬間的反応の結果であった。常時、連携のネタ探索を脳裏に焼き付けておき、目にし、耳にする情報に高感度に関知する心掛けが大切であることを痛感した。

●周りを取り込み、活動の関係者を拡げた

ピンときたプロジェクトの発想を具体化するための仕掛けをあれこれ思索し、まず、支援先である「産業研究所」での認知を、続いて大学の後押しを得るため理事長・学長の了解を得、大学が関心を持つような企画に磨き上げ、何処までの取り込みが望ましいかを熟考して「プロジェクト企画書」にまとめた。大学を取り込むために酒の銘柄を学生公募とし、ラベルのデザインにデザイン学科を誘い、販路や宣伝のために校友会(学園同窓会)を巻き込んだ。酒造りから商品化推進までまさに「オール大産大」を巻き込むこととした。

失敗の事例

酒造りのプロセスに疎かった

●酒づくりは企画から完成まで２カ年はかかる

コーディネーターは酒造りの流れを知らなかった。まず、酒米の手配から始めなければならない。酒米農家に作付けを春までに依頼しなければ、その年の田植えに間に合わない。秋に収穫された酒米は翌冬に仕込むことになるが、酒種(大吟醸酒・吟醸酒・清酒)に対応して、酒米の精米歩合が異なる。冬に仕込んだ米をその年に絞った原酒とし、その後製品とする。この間２カ年のスパンを要する。

●次年度の準備は今取りかかる

幸い、今回は蔵元が提供可能な、仕込み中の新たな酒があったので、１年足らずの期間で完成できたが、今後の展開は、いま、準備しなくてはならない。３月までに次の酒米を手配する必要がある。

　何事もその道の常識、つまり、最低限の業務知識を持たなければ本当の意味での事業推進は出来ないことを痛感した。

成功と失敗の分かれ道

創立８０周年という節目をキーワードに大学当局の後押しと、全学的な盛り上げを仕掛けたことが成功の鍵

産学官連携の新たな展開に向けた提言

コーディネーターは情報感度を常に高く

●新たな連携活動を目指して

コーディネーターは、新たな連携活動を推進する使命を、常々、脳裏にたたき込んでおき、日頃、何気なく、目にし、耳にする事柄に対して、情報感度を研ぎ澄まし、どんなことにも新たなプロジェクトの企画にピンとくるような感性を持っていなくてはならない。

●モノづくりはその道の常識が不可欠

常に、新たなプロジェクトの企画を構想し、日頃、何気なく、目にし、耳にする事柄を、新たなプロジェクトとして推進するために、コーディネーターは好奇心を失わず、自分にとって未知のことがらに対し、貪欲に自分の枠の外にはみ出し、自己の拡大に心掛けなければならない。

☆ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰの一言

新たな連携活動を推進すべく、コーディネーターは、常時必要性を頭に入れて、探索し続けていることが必須である。この備えがあったから、目にした新聞記事にピンときて、新たなプロジェクトを企画推進できた。

本件に関する連絡先：sangaku@cnt.osaka-sandai.ac.jp